吹田市立博物館

博物館だより

NO. 8

SUITA CITY MUSEUM

大韓民国の達磨窯（慶尚北道 慶州市内にて）

平成８年度特別展

「鉄道沿線物語 －鉄道の発達と吹田－」始末記

鉄道と地域の関わりを展示を通して見ていただこうと試みた「鉄道沿線物語」展を終えて、感じたことや新たに発見したことを綴りたいと思います。

明治維新と時をほぼ同じくして日本に登場した鉄道は、当時の社会や人々に大きな影響を与えました。殖産興業・富国強兵を目指した明治新政府が、近代国家建設のための重要事業として日本各地に鉄道を敷設していきました。それは直接的に物資輸送や旅客輸送に革命的な変化をもたらし、交通手段の主役の座を確固たるものとしていったのですが、庶民の生活レベルでの大きな変革も生みだしました。そこで鉄道が日本人の日常生活に少なからず影響を与えた側面からみてみたいと思います。

鉄道の登場によって人々の時間に対する感覚は、変化を余儀なくされます。江戸時代の時法では一刻が約２時間で、半刻が１時間、四半刻(小半刻)が30分となり、それ以上細かな時間の単位は普段の生活ではあまり用いられなかったと思われます。ところが列車は分単位で運行され、当然のことながら時刻表には「何時何分何処駅発(着)」という記載が表れました。幕末開港以後、欧米の機械時計が大量に輸入されるようになり、西洋時法が一般にも用いられるようになってきたようですが、やはり庶民が「分」という単位で時間を意識するようになるのは、鉄道時刻表によるところが大きいと考えられます。旧暦の明治５年12月３日を明治６年(1873)１月１日とした太陽暦の採用以前は、鉄道時刻表に「時」ではなく「字」という文字を用いて、江戸時代の時法と西洋時法との混同を避けるための配慮もありました。鉄道開業当初どれだけの庶民が鉄道を利用し、鉄道時刻表がどれだけ正確に運行されていたのかを知る術は

「京坂神戸大津間汽車発着時間表付引札」(明治14年)
大阪市立博物館所蔵

ありませんが、市井(しせい)で配られた商店の宣伝用の引札(ひきふだ)(チラシ)などに鉄道時刻表が掲載されていることから、時計の普及とともに、庶民の時間感覚は鉄道の導入と深く関わっていたといえるでしょう。ちなみに明治14年(1881)発行の「京坂神戸大津間汽車発着時間表付引札」によれば、大阪始発6時10分の上り列車は、吹田発6時26分で京都着が7時51分となっています。列車によって若干所要時間が異なりますが、上り下りとも京都－神戸間で日に10本が運転され(始発は部分運転)、吹田－大阪間が16～18分、京都－大阪間が1時間30～40分程度(茨木駅停車の有無によって約10分の時間差が生じる)であったことが窺(うかが)えます。現代の感覚からすれば大変遅いような感じですが、以前は三十石船で伏見から大坂の八軒家(はちけんや)まで淀川を下るだけでも5～6時間かかった(上りは下りの倍の時間を要した)ことを考えれば、驚くべき速さであったと思われます。当時の人々が時間を短縮することにどれほどの価値を見出していたのかは定かではありませんが……

鉄道建設当初の目的は、港や主要都市を結び産業発展のための原材料や製品などの物資輸送にあったと思われますが、戦時下においては軍事輸送の主役をつとめたり、その効力も時代とともに多岐にわたっていきます。現在では通勤通学に鉄道を利用することは至極当然ですが、住まいから職場まで毎日鉄道で通う人々が登場するのは、都市と郊外を結ぶ私設鉄道が発達した明治末年以降のことです。庶民の日常の移動距離を著しく変化させたのもまた鉄道でした。関西の私鉄はその経営戦略から沿線の住宅開発を伴なって発達し、まさに大阪を中心とする都市圏の拡大を実現していきました。箕面有馬電気軌道(現阪急電鉄)の池田室町住宅地や阪神電気鉄道の西宮住宅地などが有名です。吹田では千里山住宅地がその代表的な例で、北大阪電気鉄道(現阪急千里線)が千里山まで開通した大正10年(1921)以降、理想的な田園都市建設を目指した郊外住宅地が誕生していきました。その後沿線のそこここに見られた田畑が住宅地へと変貌(へんぼう)し、昭和30年代後半からのニュータウン建設へと結び付いていくのです。郊外住宅地の形成により都市の通勤通学圏は拡がり、朝夕のラッシュは高度経済成長を遂げた日本を象徴する光景として語られました。その意味で鉄道の発達と市街地形成を切り離して考えることは不可能であり、都市生活における鉄道の役割を再認識する結果となりました。

「阪急千里山駅の風景」(昭和32年) 野口昭雄氏撮影

平成９年度特別展

「達磨窯 －瓦匠のわざ400年－」

会期　平成９年４月26日(土)～６月８日(日)

長崎県指定文化財　松森天満宮本殿外囲塀欄間職人尽絵

かつて吹田市の天道(現 片山４丁目)や吉志部東(現岸部中４丁目)には瓦屋があり、周囲の寺院や民家の瓦はこのような瓦屋で焼かれ、村の中からモクモクと瓦を焼く煙が立ちのぼる風景は、全国いたる所で見られました。三州瓦や淡路瓦など、瓦の生産地が特定の地域に限られてしまった現在では、想像もつかない光景であります。

わが国のこのような瓦屋で瓦を焼いていたのが達磨窯です。これは全長約６ｍの小型地上窯で、中央に背の高い瓦を焼く部屋(焼成室)があり、その両側にやや低くなって薪を焚く部屋(燃焼室)があり、丁度、達磨さんが座禅しているような恰好に見えるので、このような名前が付けられたと言われています。

達磨窯の発生については、まだ確実なことが分かりませんが、発掘資料による限り、兵庫県宝塚市の旧清遺跡や、神戸市西区蘆谷町如意寺境内に古い例があり、遅くとも桃山時代には誕生していたことが窺われます。

そして、江戸時代には東北地方に至る広範囲に、燻瓦の代表的な窯として定着していたことが、発掘資料や各地で描かれた絵画資料などで知ることができます。絵画資料としては、正徳３年(1713)に描かれた「松森天満宮本殿外囲塀欄間職人尽絵」のなかの「瓦製造の部」に描かれた達磨窯が古く、また、隅田川沿岸に展開した達磨窯は、隅田川両岸図や江戸名所図会、錦絵などの画題となっています。

幕末・明治初期は伝統的な技術を保持してきた瓦職人が、西洋近代の窯業技術を体得した変革の時代で、彼らは耐火煉瓦や建築煉瓦の製造にも参画したことが、各地の資料で判明します。特別展では、官営長崎製鉄所や富岡製絲場などの関係資料を展示するほか、明治初期に、達磨窯に使われていた耐火煉瓦などを展示します。明治末期には、各地の達磨

窯は、薪から石炭焚きに改造された窯も多く、これにともない、燃焼室の下部には風道という設備が取り付けられました。

明治時代の瓦師の自慢は、なんといっても明治17～19年にわたる皇居明治宮殿の造営瓦として、製造の大役を果たしたことです。この時、各産地では腕を競って極上の瓦を焼いたのでした。愛媛県越智郡菊間町には、この時の関連資料が大切に残されており、これらから、当時の瓦師の気概を感ずることができます。

現在も操業する達磨窯(群馬県藤岡市)

測量調査中の達磨窯(愛知県高浜市)

大正・昭和の時代には、一部の大産地では平地窯や登窯も導入されましたが、達磨窯には大きな変革はなかったようです。むしろ戦時体制下における化石燃料の極端な欠乏、若手労働力の不足、そして、灯火管制による夜間焼成の制限などの外的な要素が、製瓦業界を根本的に揺るがしてきたと言えるでしょう。

達磨窯のような昇焔式の窯は、どうしても窯室の上下に温度差があり、これを解消するために、昭和30年頃には達磨窯を半倒焔式に改造する試みが行われました。しかし、このような複雑かつ高価な窯は瓦師から嫌われ、やがては昭和40年代になると、燃料危機や公害(煙害)に対して効果的な対処のできない達磨窯は、先を争うように消えてゆき、まもなく現在のオイル・ガス窯の時代に突入したのです。

今回の特別展は、達磨窯の発生以来の400年に及ぶ瓦製造史を、達磨窯を中心に学習します。展示には、発掘資料や絵画資料、産業記念物など約85点を展示するほか、今もなお産業遺構として残されている達磨窯や、現在も操業している達磨窯も紹介します。さらに現代の韓国で盛んに使われている達磨窯の様子を、図面や写真で紹介します。

また、会場には全長６ｍの現寸大の達磨窯模型、わが国現存最古の達磨窯模型や韓国の達磨窯模型も展示し、消え行く伝統産業技術を振り返ってみます。

常設展示資料より

山田銅鐸ー吹田で発見された銅鐸

●銅鐸とはなにか

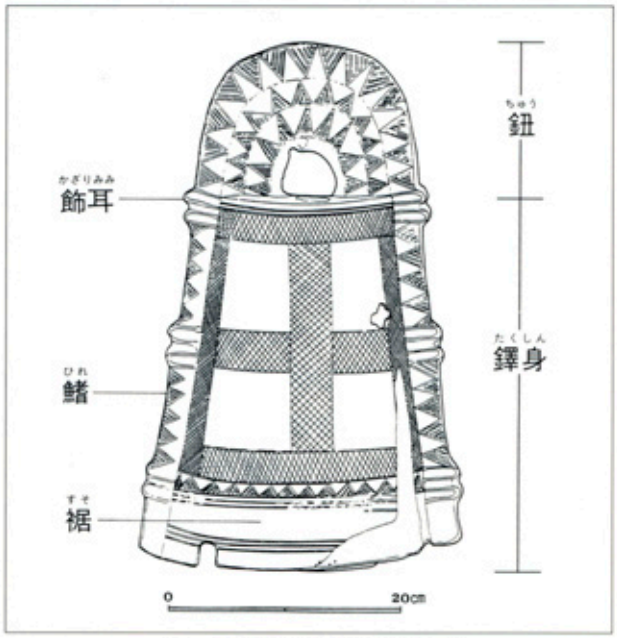
銅鐸とはなにか。最も素朴なこの問いは、実は最も難解な問題でもあるのです。これまでに、銅鐸は近畿地方を中心にして東は静岡県西部から西は広島県・島根県・四国地方の範囲で約500個が見つかっていますが、弥生時代前期のある時期に現れ、古墳時代の到来とともに地上からその姿を消してしまうこの青銅製のカネについて、現代の考古学が解き明かしたことは少ないのです。

銅鐸は稲の豊作への祈りや感謝を捧げる農耕のまつりに使われた祭器とする説が有力です。しかし、そのまつりのなかで銅鐸はどのように用いられたのかは未だ明らかではありません。また、最近の発掘調査では、銅鐸は意図的に埋められたことがわかってきましたが、それは保管したのか、捨てたのか、あるいはムラの境界を邪悪な霊などの侵入から守るためなのか、銅鐸を埋めた目的は今も謎のひとつであるのです。

●山田銅鐸の発見

吹田でもかつて銅鐸が発見されました。今から約120年前の明治11年(1878)のこと、現在の市域の東北端にあたる山田小川字下丁雅(しもちょうが)、八丁池から西北方の浅い谷の斜面で単独で出土したといわれています。開発によって当時の地形が失われた今日、出土地の詳細については不明ですが、万博記念競技場のあたりがその推定地です。発見後、この銅鐸は地元で

山田銅鐸(複製)



山田銅鐸紋様復元と各部名称

所有されていましたが、昭和２年(1927)に梅原末治著『銅鐸の研究』によって広く学界の知るところとなり、昭和９年(1934)には国の重要美術品に指定されています。現在は広島県にある耕三寺に所蔵され、当館にはその複製を展示しています。

●山田銅鐸の概要

山田銅鐸の高さは45.5cm、裾部の最大幅は28.1cm、鋳造がうまくいかなかったのでしょうか、全体として歪(ひず)みがあり、鐸身には補鋳した跡が認められます。紋様にも不鮮明なところや欠けたところがあり、飾耳ではその外形と紋様がずれて一致していません。

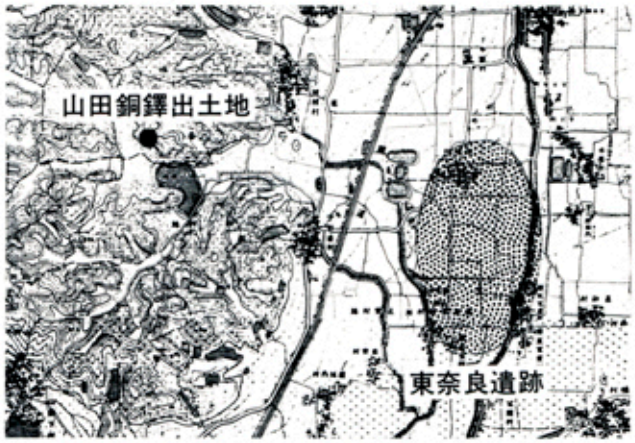
こうした鋳(い)上がりの悪さから細部についてはよくわからないところもありますが、山田銅鐸は鈕(ちゅう)と呼ばれる吊り手の形状から外縁付鈕式(がいえんつきちゅうしき)銅鐸に分類されます。初期の銅鐸は断面が菱形をした半環状の鈕を持っています(菱環鈕式)。次に鈕の外側に扁平な縁が付けられ(外縁付鈕式)、やがて鈕の内側にも縁が付き、鈕は次第に扁平な板のようになります。(扁平鈕式)。そして最後の段階では、突線による装飾が施され(突線鈕式)、鐸身も急激に大型化して１ｍを越えるものも作られるようになります。この分類は、鈕の形態の変化を鈕の「吊るす」という機能が喪失していく過程として捉えたもので、銅鐸は吊るして揺り鳴らすもの(「聞く銅鐸」)から、据え置いて用いるもの(「見る銅鐸」)へと変わっていったのです。

三島地域では３～４個の銅鐸が発見されていますが、そのうち山田銅鐸は「聞く銅鐸」で古い段階のものです。その内面の裾に近いところには１条の突帯が巡っており、内側に吊り下げられた棒(舌(ぜつ))がここと触れ合って音を出しました。

●山田銅鐸の紋様

銅鐸は全身が様々な紋様で飾られています。山田銅鐸の鐸身は縦と横との帯が交差して４つの区画を構成していますが、こうした紋様を「四区袈裟襷(けさだすき)紋」と呼びます。縦横の帯は普通斜格子(しゃこうし)紋で埋められますが、山田銅鐸では、一方の面の中間の横帯が綱代(あじろ)紋となっています。鐸身の紋様はこの他にも流水紋や横帯紋などがあり、人や動物、家屋などの絵画が描かれていることもあります。鰭(ひれ)や鈕にも装飾はみられ、鋸歯(きょし)紋、渦巻(うずまき)紋、斜格子紋、蕨手(わらびて)紋などがあります。山田銅鐸の鈕にも３列の鋸歯紋がありますが、内側から２列は外向きに付けられており、こうした例は少なく、珍しいものです。

袈裟襷紋や流水紋は稲魂を銅鐸に繋(つな)ぎとめる帯・紐(ひも)であり、銅鐸の周りを囲むように付けられた鋸歯紋は悪霊を払うためのものと考えられています。銅鐸の紋様は単に銅鐸を飾るためではなく、銅鐸

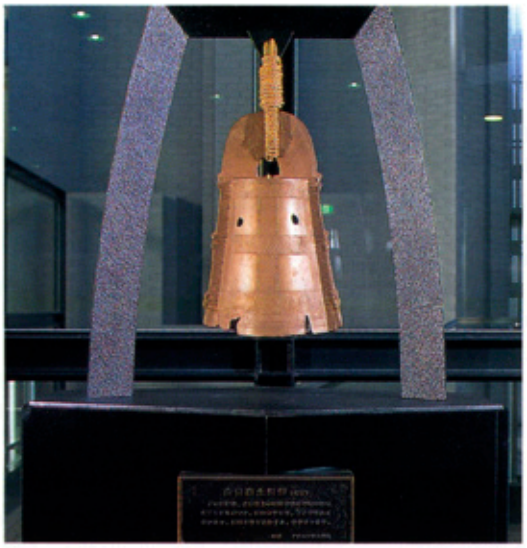


山田銅鐸出土地周辺

のまつりにおける願いや祈りが込められているのでしょう。

●山田銅鐸と東奈良遺跡

山田銅鐸の出土地から東方約2.5kmのところには北摂地域を代表する弥生時代のムラである東奈良遺跡(茨木市)があります。発掘調査によって多数の鋳型がみつかり、ここが青銅器の製造工場でもあったことがわかっています。銅鐸の鋳型は35個あり、山田銅鐸の鋳型はありませんが、大半が山田銅鐸とほぼ同じ時期のものでした。また、扁平鈕式銅鐸鋳型の鈕外縁部を飾る鋸歯紋が外向きになっており、山田銅鐸とよく似ています。こうしたことから山田銅鐸が「東奈良ムラ」で作られた可能性は十分にあり、山田銅鐸は生産地の極近くで出土した銅鐸として重要な資料でもあるのです。



復元銅鐸

博物館のロビーには弥生時代の姿に復元した山田銅鐸が展示してあります。黄金色に輝く銅鐸から響く音色はおそらくは弥生人も聞いた音でしょう。一度この音に耳を傾け、この銅鐸を使ったまつりに思いを馳せてみてはいかがでしょうか。

講演会のご案内

● 5月11日(日) 午後2時
テーマ 「達磨窯 その発生から今日まで」
吹田市立博物館 学芸員
＊当日は展示解説も行います。

● 5月18日(日) 午後2時
テーマ 「世界に類のない達磨窯 その構造と技術」
京都工芸繊維大学名誉教授 若松 盈氏

各講演会とも会場は吹田市立博物館2階講座室。聴講は無料で先着順(120名)、開場は1時30分です。

吹田市立博物館だより 第8号
平成9年3月31日発行
吹田市立博物館
〒564 吹田市岸部北4丁目10番1号
TEL. (06)338-5500 FAX. (06)338-9886

■交通案内

JR岸辺駅下車徒歩20分
JR吹田駅・阪急吹田駅から桃山台駅前ゆき、山田樫切山ゆきバス「佐井寺北」下車徒歩10分
千里中央ゆき、阪急山田ゆき、摂津ふれあいの里ゆきバス「岸部」下車徒歩10分
阪急南千里駅からJR吹田ゆきバス②・③系統「佐井寺北」下車徒歩10分